

## 最終章（前日）

【蓮ルート】

（背景：自室）

平山

「もう音楽祭前日か…

あと少しで何か掴めそうなんだがなあ……」

（ノック音）

蓮

「兄さん…今ちょっといいですか…？」

平山

「蓮か？ ああ、大丈夫だ。入ってこいよ」

（扉開ける音）

蓮

「失礼します」

平山

「おう。こんな遅くにどうかしたか？」

蓮

「いえ……その……。

明日音楽祭だと思えば落ち着かなくて……」

平山

「俺もお前も初めての音楽祭だしな。

俺もまじ吐きそう……」

蓮

「兄さんも、緊張するんですか？」

平山

「当たり前だろ。

どんな演奏会だって毎回緊張するわ」

蓮

「意外でした。

いつも兄さんはそういうのを感じない人だとばかり……」

平山

「まあ、隠してた部分もあるからな。  
そう思われても可笑しくないけど」

蓮

「何故隠す必要があるんですか？」

平山

「お前達は客の前に立つんだ。  
そんなお前達が緊張してたら良いステージは作れないだろ？」

平山

「だから俺たち裏方スタッフが  
緊張を解してやるのも仕事のうちなんだよ」

平山

「そんな奴らが緊張を全面に出してたら  
お前らの緊張を解してやれないだろ」

蓮

「そうだったんですね…流石は兄さんです」

蓮

「さすおに」

平山

「やめなさい」

蓮

「じゃあ、私の緊張をほぐしてください」

平山

「いきなり言われてもなあ…。  
うーん……………」

平山

(とりあえず、頭撫でて褒めておけば、  
いつも大人しくなるしなあ)

平山

「よし！  
こっちやコイコイ」

蓮

「ワクテカです」

蓮

「って！にににに兄さん!!？」

平山

「よーしよーし、  
お前はよく頑張ってるな。  
いつも努力してて偉いぞ」

蓮

「……に、兄さん……」

蓮

「……………」

蓮

「あの、兄さん」

平山

「なんだ？」

蓮

「もし、もしも、明日の音楽祭で優勝したら……。  
伝えたいことがあるんです」

蓮

「私頑張ります。絶対優勝します。  
なので、待っていてくれませんか…」

平山

「優勝しないと、伝えられないことなのか？」

蓮

「はい」

平山

「そうか……………、分かった。  
待ってるよ」

蓮

「ありがとうございます。私、頑張ります」

平山

「ああ、頑張れ」

蓮

「はい」

蓮

「……………必ず、兄さんを救ってみせる」

【ユエ】

(背景：教室)

平山

(教室に忘れ物するとか、ついてねえな)

??

「……ぶ……から……」

平山

(声が聞こえる。

誰かいるのか?)

ユエ

「大丈夫…大丈夫……………」

平山

「もしかして、ユエか？」

ユエ

「…………っ、タカシくん」

平山

「どうした？」

蹲って、具合でも悪いのか」

ユエ

「だ、大丈夫…」

平山

「大丈夫じゃないだろ。

顔色も悪い」

ユエ

「本当に、大丈夫だから……」

平山

「熱は、ないな」

ユエ

「具合が、悪いわけじゃないの」

ユエ

「ちょっと、明日が音楽祭本番だから

緊張しちゃって」

平山

「緊張したってだけじゃ、そんな風にはならないだろ」

ユエ

「……………」

ユエ

「……………怖い…」

ユエ

「私、いつも大事な時に失敗しちゃう」

ユエ

「頭が真っ白になって動けなくなるの」

ユエ

「もし、明日も何かミスしちゃったらって考えると怖くなって」

ユエ

「部長や葵さんは今年が最後の音楽祭なのに…………」

ユエ

「どうしよう、タカシくん」

平山

「ユエ…………」

平山

「安心しろ、なんの為に俺がいると思ってるんだ？」

平山

「最高のステージを彩ることが俺らの仕事だ」

平山

「もしお前が何かミスしたって、俺はそれすら利用してやるよ」

平山

「だから、安心して失敗しろ」

ユエ

「…………失敗、していいの…？」

平山

「失敗しないに越したことはないが、

もし何かミスしちゃっても、

俺は完璧にフォローできるからな。問題ない」

ユエ

「何でそんな自信満々な…」

ユエ

「でも、そっか…失敗してもいいんだ…………」

ユエ

「……………ありがとう、タカシくん」

平山

「震え、止まったな」

ユエ

「うん」

平山

「立てそうか？」

ユエ

「ん」

平山

「よし！」

平山

「じゃあ、帰ろうか」

ユエ(笑顔)

「うん！」

【部長】

(背景：生徒会室)

平山

「お疲れ様です」

部長

「タカシ？」

部長

「こんな夜遅くにどうしたんだ」

平山

「いえ、忘れ物したんで  
学校に戻ってきたんですけど、  
生徒会室に灯り付いてたんで」

平山

「もしかしてまだ仕事してるのかなあと思い、  
コーヒーの差し入れです」

部長

「ああ、ありがとう」

平山

「それにしても、凄い書類の山ですね」

部長

「ああ、明日はこの学園最大の行事だからな。  
仕事も多くなるさ」

平山

「でも、先輩も明日出場するじゃないですか」

平山

「この量、確実に徹夜コースですよな。  
やばくないですか」

部長

「明日必要な分はもう終わらせている。  
今、残ってるのは明日以降の後処理のやつだから、  
この半分片付けたら帰る予定だ」

平山

「いやいやいや！  
それでもその量を1人でやるのは流石にきついですよ」

平山

「俺でも手伝えることありませんか？

雑用でも何でもやりますよ」

部長

「ほう……。何でもやると言ったな」

平山

「あ、いや、でも俺にできる範囲のことをお願いします」

部長

「……ふっ、もちろん、それは心得ている」

部長

「そこの机の上に置いてある書類を整理してくれるか？」

部長

「一般生徒が見てはいけない

機密書類は入っていないから、安心してくれ」

平山

「分かりました」

(書類を書く音)

平山

「……」

部長

「……」

平山

「それにしても、この間も思いましたけど、部長って凄いですよね」

部長

「なんだ、急に」

平山

「これだけの書類の山を簡単に捌くし、俺の方向音痴も緩和させるし」

部長

「それは過大評価だ。

いつもは書類はもっと少ないし、

方向音痴だって直したのはお前であって私ではない」

平山

「そういう謙虚なところも凄いと思います」



部長

「は…？この私が謙虚に見えるのか？

タカシ、お前病院行った方がいいんじゃないか」

平山

「確かに表面上は言葉使いと相まって謙虚とは程遠いですけどね」

部長

「……」

平山

「でも、根は真面目で、人の事をしっかり観察して陰ながら人助けしちゃう実は乙女チックな女性だって、皆気づいてますよ」

部長

「私はそんなできた人間じゃない……」

平山

「そんなことはないですよ。

じゃなきゃ、生徒会長になんてなってないでしょうしね」

部長

「……………乙女チックは余計だ……」

平山

「え～、1番重要な部分じゃないですか」

部長

「うるさい！黙って手だけ動かせ！！」

平山

「照れちゃって、ほんと先輩って可愛らしいですね」

部長

「か、かわっ……っ！！」

平山

「可愛らしくて、優しくて、生徒を第1に考える。

そんな部長が、愛らしいと同時に、少し心配になります」

平山

「いつかその優しさが先輩を殺してしまうんじゃないかと、そう考えてしまいます」

部長

「何を馬鹿を言っているんだ」

平山

「部長、本当は既に芸能界に居られる立場ですよ」

部長

「…………っ！！」

平山

「その人を惹き付ける力と類まれなる才能。

企業が放っておくはずありません」

平山

「それでも、全てのオファーを蹴って

ギリギリまでデビューを先延ばしにしているのは」

平山

「この音楽祭の流れを変えるため……………ですよ」

部長

「何を根拠にそんなこと言っているんだ。

私はもう3年で後がないんだ」

部長

「オファーが来ていたら何だって受けるさ」

平山

「音楽祭の参加条件はデビューしていない生徒。

そしてココ数年の部活動での音楽祭不参加率」

平山

「生徒に、示したいんでしょう。

部活動でも優勝できるって。

それで、またみんなに戻ってきて欲しいんでしょう」

部長

「…………っ、……違う」

平山

「俺、実はいろんな企業にお友達がいるんですよ」

平山

「部長と知り合いだって知られた途端

紹介してくれって言われまくりでした」

部長

「……………はあ…」

部長

「そうだ…

お前の言った通りだよ」

部長

「私のデビューは音楽祭が終わるまで待ってもらっているのが現状だ」

部長

「音楽祭で優勝出来なかったら、  
この夢を諦めて大学へ進学することも伝えてある」

平山

「進学って……」

部長

「みんな、私の我儘についてきてくれたのに、  
私だけオファーを貰うのは可笑的だろう」

平山

「…まったく、そういうところが心配だって言っているんです」

平山

「大丈夫です。みんなオファーを貰えるくらいの実力はありますし、  
案外みんなも先輩と同じで保留にしてもらっているんじゃないですか？」

平山

「だから、夢を諦めるなんて言わないでください」

部長

「タカシ……」

平山

「それに、俺達が優勝を逃すなんて有り得ないので、  
その心配は無用です！」

部長

「ああ、そうだな」

部長

「今の私たちがらきっと…」

【葵】

(背景:部室)

葵

「……………はっ、……………はっ」

平山

「お疲れ様です、葵先輩」

葵

「うわああああっ……！」

葵

「やまちゃん！いつの間に入ってきてたの!？」

平山

「ついさっきですよ」

葵

「もうもうビックリしたよ～」

平山

「これ、差し入れのココアです」

葵

「うわーい！糖分だー！」

葵

「私甘いのが好きー！

ありがとう～」

平山

「どういたしまして」

平山

「こんな夜遅くまで練習してるんですね」

葵

「明日が本番だからね～。

練習してないと落ち着かなくてね～」

平山

「先輩が落ち着いたところなんて見たことないですけどね～」

葵

「むむ！私はいつも冷静沈着だよ！

お淑やかな先輩様だよ！」

平山

「はっはっは」

葵

「やまちゃんももっと私を敬うべきなの～」

平山

「ちゃんと敬ってますよ」

平山

「可愛がっててもいますが」

葵

「むむー！ むむー！！」

葵

「部長との扱いの差が激しいの～！

納得いかないの～！」

平山

「はいはい」

葵

「明日見ててね！

ちゃんと先輩らしくビシッとキメるんだから～！」

平山

「はい。頑張ってくださいね」

葵

「むむーーー！！」

【ひかり】

(背景:部室)

ひかり

「……………はっ、……はっ」

平山

「おつかれ、ひかり」

平山

「これ、差し入れの緑茶」

ひかり

「タカシくん、ありがとう。

ちょうど飲み物買おうと思ってたから助かるよ」

平山

「どういたしまして」

平山

「ひかりはいつもこんな夜遅くまで練習しているのか？」

ひかり

「うん、まあね」

ひかり

「私の実力はまだまだ世界に通用しないってことは分かってるから。

その分、練習しないと…」

平山

「そうか、でも明日は本番なんだから、身体を休めるべきだと思うぞ」

平山

「熱でも出したら大変だからな」

ひかり

「そうね、もう少し練習したら帰るよ」

平山

「ほどほどにな」

ひかり

「うん、心配してくれてありがとう」

平山

「おつかれ」

ひかり

「また明日ね」

## 最終章当日

(背景：ステージ裏)

部長

「ついに本番当日だ」

平山

「蓮、緊張してないか」

蓮

「大丈夫です」

平山

「本当に緊張してないか？」

蓮

「大丈夫です！

何回も聞かれると緊張するじゃないですか！」

平山

「はは、すまんすまん」

ひかり

「やっと、ここまで来たんだね」

葵

「今日は～優勝するぞ～！」

ユエ

「ん！」

部長

「時間だ。行くぞ」

【ユエ】

ユエ

「タカシくん…」

平山

「……………」

ユエ

「……………昨日言ったこと、覚えてる？」

平山

「覚えてるよ」

ユエ

「もう1回。言って…」

平山

「……ユエ、

このステージはお前のステージだ。

お前が何をしたって構わない」

平山

「失敗したっていい。

予定外のことをしたっていい」

平山

「たとえば、お前の頭の中が真っ白になって動けなくなったとしても」

平山

「完璧にフォローしてやる」

平山

「だから、安心して行ってこい」

ユエ

「くふ……頼りにしてる…」

平山

「ああ」

ユエ

「……行ってきます」



【蓮】

蓮

「兄さん、昨日の約束  
覚えてますか？」

平山

「優勝したらお前のお願いを聞くってやつだろ？  
もちろん覚えてるよ」

蓮

「ならいいです」

蓮

「兄さん」

蓮

「見ていてくださいね」

平山

「もちろん」

【部長】

平山

「部長！」

部長

「…………？」

平山

「優勝、しましうね」

部長(笑顔)

「ああ、もちろんだ！」

【葵】

葵

「見ててね、やまちゃん！」

葵

「絶対「先輩素敵です。惚れました！」って言わせて見せるんだから～！」

平山

「ちゃんと見てますよ」

平山

「行ってらっしゃい」

葵

「えへへー

行ってきまーす」

【ひかり】

ひかり

「タカシくん」

平山

「どうした？」

ひかり

「……ううん、なんでもない」

ひかり

「行ってきます」

(背景:ステージ上)

司会

「(前団体名)の皆さんでした！

盛大な拍手をお願いします！！」

司会

「さて、本日最後のステージとなりました。

軽音楽部の(団体名)のご登場です!!」

観客

「きゃあああああ……っ」

ひかり

「よろしくお願いまーす！」

葵

「よろしく～」

司会

「さて、本日最後となりましたが、意気込みの程をお願いします！」

ユエ

「負けません…。」

部長

「今までの練習の成果を出し切るだけです」

司会

「気合い十分ですね！

まるまるまるさんは今日の為に新曲を用意してくださったとか」

蓮

「はい。今までの私たちの集大成のような曲です」

司会

「聞かせていただくのが楽しみです！」

司会

「(団体名) のみなさんで、

「Utauyo!MIRACLE」！」

(音ゲー開始)

観客

「きゃあああああ……………」

観客

「頑張れー！」

観客

「応援してるからー！！」

【ユエ】

ユエ

「はっ……。はっ……………」

ユエ

(自分には、何も出来ないと思ってた)

ユエ

(自分を変えようとしても、  
変えられなかった)

ユエ

(いつも頭の中にあるのは観客の失望の顔)

ユエ

(でも、今日は違う)

ユエ

(まっすぐに、  
このステージのことだけを考えて、  
ライトを浴びてられる)

ユエ

(気持ちがいい、とても)

【蓮】

蓮

「……………っ……………」

蓮

(兄さん、兄さん)

(今までも、これからも)

私は兄さんの為だけに引き続ける)

(兄さんが私以外に目を向けないように)

(ここで優勝出来れば、芸能デビュー)

(今までは芸能デビュー出来てなかったから兄さんの暇つぶしとして、ゴミクズ共の演出も  
担当させてあげてたけど……………)

(私がデビューしたら、もうそんな必要もないよね)

(兄さんは、私だけを見てればいい)

(私だけを見てっ…!!)

【部長】

部長

「……ふっ、……」

(音楽祭での優勝を目指してから、

やっと、ここまで来たんだ)

(自分と、仲間の力を信じて、

全力を出し切る)

(まだだ。もっと)

(もっと私たちは上に行けるはずだ。

こいつらと一緒になら)

【葵】

葵

「………はっ、………はっ」

(自分は、何をやっても駄目だった)

(頭も悪いし、空気を読むのだって苦手)

(それでも、唯一、これだけは褒められた)

(私には、これしかないから)

(だから、負けられない)

【ひかり】

ひかり

「………ふっ、……ふっ」

(ずっと、憧れていた)

(スポットライトを浴びて汗だくになって

なのに、とても綺麗な彼女たちに)

(私もみんなを笑顔にしたいんだ)

(そのための第1歩)

(必ず、掴み取ってみせる！)

【葵、ひかり】

観客

「……………わあああああっ…!!」

司会

「(団体名)の皆さんでした！

盛大な拍手をお願いします！！」

ユエ

「はっ…、はっ……」

ひかり

「やったね……。全力で……」

司会

「以上で全ての団体が出演しました。

ただいま、得点の集計中です。

投票は会場の審査員、そして

ここにいる観客の皆さんによって行われます。」

部長

「……………」

葵

「う～……………」

司会

「……………ただ今、結果が出ました！」

蓮

「……………っ、……………」

平山

「……………」

司会

「第58回山中学園音楽祭、優勝は……………」

司会

「(別の優勝者名)です！」

観客

「きゃああああ……………っ！」

部長

「……………」

ひかり(驚き)

「そんな……………」

ユエ（無き）

「……………うう、」

蓮（無き）

「……………」

葵

「……………あ、」

葵

「あはは、負けちゃったね～」

ひかり（無き）

「葵先輩…」

葵

「そんな顔しちゃダメだよ～！

まだみんなが見てるんだから！

笑顔で終わろう」

葵

「優勝は出来なかったけど、

私はみんなと一緒に演奏できて幸せだったよ。楽しかったよ」

葵

「だから、笑ってよ」

部長

「葵…」

部長

「そうだな、まだ私たちはステージの上にいるんだ。

客席へ笑顔を届ける私たちが泣いてたらダメだよな」

ユエ

「部長…」

蓮

「悔しいですが、今は優勝者を讃えましょう」

葵

「優勝おめでとうなの～！」

司会

「おおっと！

何とステージ側からも賞賛の声が！

今までこんなことがあったでしょうか！！」

司会

「優勝したさんかくさんかくさん、何か一言お願いします」

優勝者

「こんなに、皆さんから祝っていただけて光栄です。  
ありがとうございました！」

司会

「これにて、第58回山中学園音楽祭を終了致します。  
本日は誠にありがとうございました！！」

観客

「……………わあああああっ…!!」

【葵】

(背景:中庭)

平山

「葵先輩」

葵

「あー！やっほーやまちゃん！」

葵

「こんなところまでどうしたのかにゃ〜？」

平山

「打ち上げ場所、変更になったそうなので、  
伝えに来ました」

葵

「そっかあ、わざわざありがとね〜」

葵

「でもごめん、今日は行けそうにないや」

平山

「……………っ、先輩」

平山

「確かに、今回は残念な結果に終わってしまいましたが、来年また頑張れば」

葵

「無理なんだよ」

葵

「私は今年が最後のチャンスだったんだよ、やまちゃん」

平山

「……………っ！」

葵

「これからは大学進学に向けて勉強漬けの毎日だよ〜」



平山

「でもっ！まだチャンスは残ってるじゃないですか！

秋とか冬にも、小規模ですけどこういう行事ありますし」

葵

「私、それほど頭よくないからさ～

今から勉強しないと私立すら危ういんだって～」

葵

「お母さん達からも言われてたんだ。

音楽祭で優勝出来なかったら諦めるって」

葵

「だから……………ごめんね」

平山

「先輩……………」

葵

「私と部長はいなくなるけど、

ユエたん、ひかりん、それに、れんれんもいるから」

葵

「来年、絶対優勝してね！」

平山

「……………っ、……はいっ!!!!

絶対に優勝します!!!!」

葵

「絶対だからね」

葵

「頑張れ！若人諸君！！」

(葵ルート終了)

【ひかり】

(背景:屋上)

平山

「惜しかったな…」

ひかり

「うん、部活動で総合2位になったのは、ここ数年なかった快挙だって。

みんなから、おめでとうって、言われた」

ひかり (泣き)

「でも…よろこべないよ……」

ひかり

「悔しいよ……」

平山

「そりゃあ、悔しいよな」

ひかり

「惜しかったねって慰めようとしてくれたのはタカシくんぐらだよ」

ひかり

「みんな、おめでとうおめでとうって…」

平山

「なあ、もうここはステージの上じゃねえし、誰もここには来ないだろうし」

平山

「もう、泣いたっていいんだぞ」

平山

「よく、頑張ったな」

ひかり

「……ふっ、……うう」

ひかり

「うわああああん……っ！！」

ひかり

「悔しいっ…悔しいよお……」

ひかり

「来年こそ、来年こそ絶対に優勝してやるんだからあああああ……っ！！」

ひかり

「うわああああん……っ！！」

平山

俺達は負けた。その現実には深く重く俺達の心にのしかかった。

平山

ひかりの叫びにも似た泣き声は、夕焼けに染まる真っ赤な空へと消えていくのだった。

(ひかりルート終了)

【ユエ、蓮、明石】

観客

「……………わあああああっ…!!」

司会

「(団体名)の皆さんでした！」

盛大な拍手をお願いします！！」

ユエ

「はっ…、はっ…………」

ひかり

「やったね……。全力で…………」

司会

「以上で全ての団体が出演しました。

ただいま、得点の集計中です。

投票は会場の審査員、そして

ここにいる観客の皆さんによって行われます。」

部長

「……………」

葵

「う～……………」

司会

「……………ただ今、結果が出ました！」

蓮

「…………っ、…………」

平山

「……………」

司会

「第58回山中学園音楽祭、優勝は……………」

司会

「(団体名)です！」

観客

「きゃああああ……っ！」

ユエ

「やった………！」

ひかり

「勝ったー！ー！ー！」

蓮

「やりました！」

部長

「嘘みたいだ！信じられない！」

葵

「はっぴーはっぴー！いえーい！」

観客

「おめでとー！」

観客

「おめでとー！まるまるまる！！」

観客

「おめでとう！よく頑張ったねー！」

平山

(ああ、眩しいな)

平山

(プレイヤーも、お客さんも、全員が笑ってる)

平山

(この光景がたまらなく眩しいから、忘れられないから)

平山

(だから…俺はこの仕事が止められないんだ)

【ユエ】

(背景:部室)

ユエ

「タカシくん」

ユエ

「もうすぐ、打ち上げ始まるから  
迎えに来た」

平山

「そうか、わざわざありがとな」

平山

「皆を待たせると悪いし、急ごうか」

ユエ (照れ)

「…………っ、…………あの！」

平山

「…………？」

ユエ

「……………っ」

ユエ

「あの、あの」

ユエ

「……………っ、…………」

平山

(これは、テンパってるな)

平山

「ユエ、とりあえず落ち着け」

ユエ

「おちおちおちつ」

平山

「はいはい、吸ってー」

ユエ

「すーーー」

平山

「吐いてー」

ユエ

「はーーー」

平山

「……落ち着いたか？」

ユエ (デフォ)

「ん…ごめん…….」

平山

「謝る必要なんてねえよ」

平山

「言ったろ？ お前の頭が真っ白になるくらいテンパっても完璧にフォローしてやるって」

ユエ

「うん……その言葉のおかげで、

今日のステージ、全力を出し切ることができた」

ユエ

「今日だけじゃない、今まで、私を支えてくれたのはタカシくんだった…」

ユエ

「歌手をやめようと思った時も、絶望で前が見えなくなった時も」

ユエ

「タカシくんのステージを見たら、いつの間にか笑ってて、楽しくなって、また頑張ろうって思えた」

ユエ

「タカシくんの作るステージが大好きだった」

ユエ

「そんな時期を過ごしてるうちに、このステージを作る人はどんな人なんだろうって、考えるようになった」

ユエ

「寝ても冷めてもタカシくんのことばかりを考えるようになった」

ユエ

「会ったこともないのに、タカシくんのことを好きになってた」

ユエ

「そんな時、タカシくんが転校してきたの」

ユエ

「タカシくんと接していくうちに、もっともっと好きになっていった…」

ユエ (照れ)

「タカシくん……好きです。

私と付き合ってください……」

平山

「ユエ……」

平山

「俺も、ずっとユエに惹かれていました。

こんな俺で良ければ、

よろしくお願いします」

ユエ (笑顔)

「…………っ、……嬉しいっ！」

ユエ

「私、これから頑張る。

いっぱいいっぱい頑張る…」

ユエ

「それで、絶対人気歌手になるっ…！」

ユエ

「ずっと、君のステージの上に立てるように」

ユエ

「私、もう負けない」

平山

「ああ、ユエなら必ず、人気歌手になれるよ」

ユエ

「もちろん！

だって……」

ユエ

「君がいるから!!」

(ユエルート終了)

【蓮】

(背景:自宅)

蓮

「今日はお疲れ様でした、兄さん」

平山

「おつかれ、よく頑張ったな」

蓮

「ありがとうございます」

蓮

「兄さん、その……少し真面目な話をしてもいいですか」

平山

「真面目な話？」

蓮

「はい」

蓮

「実は今日、私たちの演奏を見に来てくださった  
芸能事務所からいくつかオファーをいただきました。」

蓮

「これで、晴れて私も芸能デビューです」

平山

「そ、うか、そうかっ！

おめでとう！！」

平山

「よく頑張ってたもんな！良かったな！！」

蓮

「兄さん…はい。

ありがとうございますっ……！」

蓮

「それで、昨日の約束のことなんですけど…」

平山

「ああ！音楽祭優勝に加えてお前のデビュー決定祝いだ！  
俺に出来ることなら何でもするぞ！！」

蓮

「では……………」



蓮

「これから、私のステージは全て  
お兄さんに手がけていただけないでしょうか！」

平山

「そんな事か？ もちろん構わない。  
むしろ、こちらからお願いしたいくらいだよ」

蓮

「ありがとうございます！！」

蓮

「では、すぐに今取引している契約は破棄してください。  
後任の方はこの一覧表の中から選べば大丈夫です。  
兄さんには劣りますが、兄さんの後任を務めることはできると思います」

平山

「ちょ、おい待て。  
契約を破棄って、そんなこと出来るわけないだろう」

蓮

「何故ですか？」

平山

「何故って…  
一度契約したものを破棄するのは信用を失うことと同義なんだぞ？」

平山

「今後、仕事を得ることが出来なくなるかもしれないんだ」

平山

「そもそも、蓮と契約したからといって  
他の会社との契約を切る必要はないだろう」

蓮

「……ああ、すみません。説明不足でした」

蓮

「これから、兄さんは私の専属になるので、  
そもそも他の仕事を受ける必要はありません」

蓮

「また、生活範囲もこの家の中だけにしてください。  
仕事以外で外に出ることは許しません。  
仕事でも外出する際は私が同伴します」

蓮

「なので安心してください。

もう学園でクズ共と喋ることも、

仕事でビッチをあいてにする必要もないんです」

蓮

「ああ、私の兄さん」

蓮

「可哀想な兄さん。最高のステージを手がけるためとはいえ、

人間の形をした害虫と接しなくてはいけないなんて」

蓮

「でももう大丈夫です。

これからは私がいます。

害虫を相手にしなくても、私が最高のステージを作って見せます」

蓮

「愛してます、兄さん」

蓮

「私だけを見て私だけを感じて私だけを思って」

平山

「れ……ん……」

蓮

「ああ、兄さん、これからの私たちの為とはいえ、

今から兄さんを気づつけることをお許してください」

平山

「蓮、何をっ!？」

蓮

「大丈夫、兄さんが寝ている間にお引越しを済ませるだけです」

蓮

「この家は兄さんを匿うには少々設備が足りないですからね」

蓮

「新しい家には地下室も鎖も全て常備しているので安心です」

(スタンガンの音)

平山

「れっ……ん……………」

平山

「……………」

蓮

「おやすみなさい、兄さん」

蓮

「大丈夫です。

兄さんには、」

蓮

「私がいるから」

(蓮ルート終了)

**【部長】**

(背景:舞台ホール)

平山

「部長」

部長

「タカシか…」

平山

「みんななら、もう打ち上げ会場に行きましたよ」

部長

「そうか……」

部長

「今日の音楽祭の後、私たちに沢山のオファーが来たよ」

部長

「是非、君たちを使わせて欲しいって」

部長

「君たちをって」

平山

「やりましたね」

部長

「ああっ……。やったよ…ついに……」

部長

「お前のおかげだ。

ありがとう、タカシ」

平山

「俺の力なんて微々たるものですよ。

優勝できたのは先輩方の実力です」

平山

「……………もし、もし良かったらなんすけど」

平山

「……俺に、これからも先輩方のステージを作らせてください！」

部長

「……………」

部長

「はあ……………」

お前は何を言っているんだ」

部長

「オファーが来た君たちの中には、

お前も入っているに決まっているだろう」

部長

「ユエや蓮も、お前を含めて（団体名）だと力説していた」

部長

「これからもよろしく頼む」

平山

「……………っ、はい！よろしくお願ひします！！」

部長

「さて、みんなを待たせるのも悪いし。

打ち上げ会場に行くか」

平山

「ああ、すみません。

あともう1言だけ」

部長

「ん？ なんだ？」

平山

「好きです。

付き合ってください」

部長

「……………今、なんて言った」

平山

「好きです。

付き合ってください」

部長

「……………私もここ数日忙しかったからか、  
幻聴が聴こえるようになってしまったようだな」

平山

「幻聴ではありません。

先輩、ずっと先輩のことが好きでした。

愛しています。

付き合ってください」

部長

「…………っ、…………っ！！」

部長

「む、無理だ！！」

部長

「お前のような優しいやつにはもっと他にいい女がいるだろう」

平山

「先輩以上のいい女なんていません！

俺は諦めません！！

今は無理でも絶対惚れさせてみせます」

部長

「なっ……」

部長

「なんで、そこまで……」

部長

「私なんて、言葉遣いは荒いし、男勝りだし」

平山

「部長はもっと自分の魅力に気づいてください」

平山

「部長は気遣い屋さんで優しくて、

みんなの為に努力を惜しまない、そんな素敵な人です」

平山

「それに中身は乙女なロマンチストで料理上 上手で」

部長

「わ、分かったから！もうそれ以上言うな！！」

部長

「お前は、本当に私でいいんだな!？」

平山

「部長が、いえ、優さんがいいんです！」

部長

「そ、そう言うのであれば、

私に異論はない」

部長

「私もお前のことが、すっ、す……」

部長

「……」

部長

「好き………だから」

平山

「ゆ、優さーん！！」

部長

「あ、おいこら！抱きつくな！！」

平山

「優さん大好きです！」

部長

「…ああ、私も」

部長(微笑み)

「大好きだよ」

(部長ルート終了)